

C. Nielsen

C. ニールセン

交響曲第2番 短調『4つの気質』Op. 16

Symphony No. 2
“De fire temperamentet”

誤解なさるぬよう先に申し上げます！「四つの気質」とは単なるレッテル貼りでもなければ、自らを型に押し込むことでもありません。気質はその人だけの大切な宝物です。「四つの気質」は私を映し出す鏡のようなもの。本日ご来場のお客様方は、それぞれの鏡にどのような思いを、どのような“私”を映されますでしょうか。

カール・ニールセン (1865 ~ 1931) はデンマークの小さな村に生まれました。彼の家はなんと 12 人兄弟であり、かなり貧しい生活だったそうですが、ペンキ職人であった父は村の音楽隊を編成するなど明るい性格であり、優しく穏やかな母はしばしばカールに民謡を歌って聞かせたといひます。7 歳で初めてピアノに触れ、14 歳の時には隣町オーデンセの軍楽隊に入隊するなど、音楽に関わる機会の多かったニールセンは 19 歳のとき、ついにコペンハーゲンの音楽院にて本格的に音楽を学ぶこととなり、彼の作曲家人生がスタートします。

本日演奏する交響曲第2番は、1902 年、ニールセンが 37 歳のときに作られました。この曲には『四つの気質』という副題がついていますが、この『四つの気質』にはある一枚の絵が関係しています。彼が旅行に行ったときのこと、ニールセン夫人と仲間たちとで酒を飲んでいると、壁に奇妙な絵がかかっていることに気がつきました。その絵は 4 つに区切られていて、それぞれ人物が描かれていました。その 4 人こそ「四つの気質」を表すもので、ニールセンはこの絵が頭から離れず、次第にそこに音楽的な可能性を見出し、交響曲第2番を作曲するに至るのです。

さて、この「四つの気質」とは一体なんでしょうか？このお話をするには紀元前 400 年頃のギリシャまで遡らなければいけません。「四つの気質」というものを初めて提唱したのは医学の祖と言われるヒポクラテスです。彼は人間の体の中に胆汁・粘液・黒胆汁・血液という四種類の体液があるといい、その体液のバランスによって健康状態や性格が決まると主張しました。この四体液説から生まれたのが、胆汁質 (胆汁)・粘液質 (粘液)・憂鬱質 (黒胆汁)・多血質 (血液) という「四つの気質」であり、ニールセンが見た絵画もこの気質を描き出したものでした。

○4つの気質

- 胆汁質 - ついカッとなり、怒ると誰にも止められない。決断力があり、強い意志を持ち、目標は必ずやり遂げる、力に満ち溢れた英雄気質。
- 粘液質 - いつもおだやかでのんびり屋。根気強く、夢見がちで、一人でいることが好きで、動くことがあまり好きではない、落ち着いた学者気質。
- 憂鬱質 - いつも何かを考えている。慎重で、注意深く、同情深く、控えめで、気になったことには根気強い、落ち込みやすいけど誠実な気質。
- 多血質 - どんなときでも素早く動いている。あらゆるものに好奇心が溢れ、何にでも積極的で、朗らかで明るく、くよくよなんてしない活き活きた気質。

どの気質も良いところ・悪いところがありますが、どれもとても魅力的な表情をしています。これらが混ざり合って初めて人の気質ができあがるため、人は皆自分の気質の中に「四つの気質」を見出すことができるのです。もしも本日演奏致します四つの楽章のそれぞれに、何か共感していただけたところがあるならば、これほど嬉しいことはございません。